

総合学科の創設について

—熊本県下初の実践をとおして— (Ⅱ)

益 田 亮 英

8 総合学科の特徴を生かした学校経営

総合学科を成功させるためには、その特徴を生かした柔軟な学校経営が求められる。平成17年度総合学科は全国に286校設置されている。しかし、学校規模も大小様々、系列も普通・商業を中心としたものから農・工・商・普通と広範な学習領域を持つものまであり同じものは一つとしてない。そのような中では共通した悩みや課題はあるが、個々については独自で判断して取り組まなければならない。翔陽高校の実践をもとに総合学科の学校経営について要点を述べたい。

(1) キャリア教育と地域との連携

総合学科が普通科や専門学科と大きく違うところは、高校に入学してから高校3年間で学習する分野や科目を決めていくところである。総合学科では、生徒は自分自身の個性を発見し、進路目標を定め目標達成に向かって、自ら決めたスケジュールに沿って学校生活を送ることになる。様々な学習の機会を通して、職業観や勤労観を確立することが求められる。そのためには、1年次の「産業社会と人間」、2年次の「インターンシップ」、そして3年次の「総合的な学習」における課題研究と3年間を通じた系統的なキャリア教育が必要である。「産業社会と人間」や「インターンシップ」は、いずれも学校単独で展開することは不可能であり、地域社会の協力がなくては実施できない。地域に対して学校は常に正確な情報を発信し、理解と協力を得るよう努めなければならない。「産業社会と人間」での企業訪問、「インターンシップ」など、総合学科の趣旨や特徴など地域の人たちに機会あるたびに説明することが大切である。幸いに大津町の場合、「あけぼの会」という、町と地域の企業等の連絡会が定期的の実施され、県立学校もメンバーとして会合に参加していたため様々な機会に学校の現状や総合学科について理解を求めることができた。また、開かれた学校づくりの一環として大津町が設定した教育の日（毎月14日）にも、積極的に協力し学校開放に努めた。町の福祉課などと連携し一人暮らしの高齢者の料理教室開催など、近隣の各種施設との数多くの交流会などを催し情報発信に努めた。

(2) 保護者への浸透

保護者にとって、専門学科や普通科の高校であれば所属している学科から、自分の子どもがどのような内容の学習をしているかおおよそ見当がつく。しかし、総合学科の場合、翔陽高校を例にとると学習領域は工業、農業、商業、家庭、普通科目と多岐に渡っており、その中から生徒は選択するのであるから、生徒と保護者のコミュニケーションが十分でないと自分の子どもがどのような科目を選択して学習しているか全くわからない。保護者は学校に任せるのではなく学校の

様子を十分に理解しておかなければならない、そのためには保護者が数多く学校へ行くことが必要である。学校に接する機会を増やし、総合学科についての保護者の理解を深めることが大切である。翔陽高校では合格発表の翌日から、新入生ガイダンスを実施している。今までは1回の合格者招集で終わっていたところを、総合学科になって3回実施するようにした。科目選択のガイダンスに加え、総合学科では親は幾度も学校に行かなければならないという意識付けとともに、“履修”や“修得”といった教育用語にも慣れてもらうことを目的とした。さらに平成13年度からはPTA活動の一環として“一人一役運動”を展開し、何度も学校に足を運ぶということを通して親の関心を学校に向けさせた。

(3) 教師の意識改革と人的・物的条件整備

学校の改革を進める上で最も重要なことは教師の意識の改革である。このことは、総合学科に改変後、数年間で募集停止に至った私学の校長が「失敗にした原因は、教師の意識を変えることができなかったこと。」と語っていることでもその大切さがうかがえる。

総合学科の教師の力量を高めるためには学科の制度を知るだけでなく、生徒の「個性」を正確に把握し、的確なガイダンスを行うことのできる力を養う取り組みが必要である。翔陽高校では科目選択などいろいろな具体的な問題を提示し、教師で考えあう参加型の研修会を何度も実施しお互いの理解度を高めた。

選択制の総合学科高校では多くの科目を開設し、生徒の希望によって講座を開講しているから、開講科目や講座数が多い。比較的開講科目が多いとされる専門高校と比べても、一人が担当する科目数が多い。このことを大変な負担と感じる教師もいて、総合学科は大変だという大きな理由の一つになっている。科目数は多いが1講座当たりの受講者は、普通高校や専門高校に比べると少なく、少人数授業が実施されている。(表8-1)従来のような多人数授業と比較すると担当科目数や授業時間数が増えたことより、少人数授業の方がはるかに楽であるといっている教師も多い。しかしながら、総合学科の教師には全生徒を対象にしたガイダンスをはじめ、授業後の各種データ処理など多く作業が課される。教育活動に専念するためにはできる限り付随的な負担を軽減するとともに、臨採講師や非常勤講師の充当などの人的な支援を行い、多様な科目を展開して生徒の希望を実現するよう心がけなければならない。

また、開講科目が増え、講座数が増えた分多くの教室が必要になる。翔陽高校の場合、総合学科棟の新築に加え、ワンシューズ化や教科職員室の廃止転換等によって数多くの講義室を生み出した。

表8-1 授業展開状況

平成15年度学校の概要

年 次	科目数	講座数	1 講座当たりの人数
1 年次	20	93	33.7
2 年次	39	110	26.8
2・3 年次合同	17	57	14.4
3 年次	70	116	19.8

(4) 学校設定科目と自由選択科目の開設

指導要領では学校の地域、学校および生徒の実態、学科の特色に応じ、特色のある教育課程の編成ができるよう学校設定教科、科目が設けられるようになっている¹。

農業・工業など専門課程から学科改編してスタートした翔陽高校は、専門学科時代に蓄えた多くのノウハウを持ち地域からも信頼されている。その蓄えられた知的な財産を学校設定教科や科目として設け、総合学科に生かすことが新しい総合学科の発展へとつながる。

翔陽高校では、学校設定科目として「グリーンデザイン」を設け、学校指定科目として全生徒に必修としている²。

「グリーンデザイン」の学校指定科目としての目的は、「“農”に関する総合的な知識や技術は、健康で豊かな生活を営むためにも欠くことのできない重要なものであるということ。また、環境問題も国民的課題となっており、人間生活と自然環境との関わりを理解し、健全な生活を営むための環境作りに役立たせる。」としている。前身の産業高校時代から施設設備が整い、指導者の人材も豊富であることと、多くの卒業生を地域農業の担い手を送り出してきたという歴史と伝統を大切に地域への信頼を得るためであった。「グリーンデザイン」では、すいかやトマト、メロン、草花の播種や定植等の栽培管理や生育の観察などの体験学習を行っている。果物類は試食会で収穫の感動を味わい、草花は学校正門前の道路の花壇に植えつけたり、プランタにして地域の公共施設を飾るなどボランティア的な学習を行っている。「土の恵みを実感する環境教育」として定着している。

専門分野の科目の授業を体系的に展開し、系列の専門性を発揮するためには最低3名の教諭が必要である。特定の系列の科目を選択する生徒が減ると、当然のことながら他の系列の科目選択者が増える。総合学科の教員定数から職員の数には上限があるから、担当時間数と科目数の上で教科間のアンバランスが生じる。系列間の負担の平等化を図るために自由選択科目を開設して、系列や男女の性別に関係なく生徒が気楽に選択できるような科目を準備して生徒を分担するような工夫が必要である。翔陽高校では「ガーデニング」「ホースライディング」「マルチメディア利用」「スポーツⅡ」「生活調理」などを設定し、専門性・体系性に関係なく興味・関心だけで選択できるように配慮した。現在、これらの科目は大変人気があり受講者も多い。(表8-2)

表8-2 (主な自由選択科目の履修者数) 平成18年度学校経営案

科 目	2 年	3 年	合 計
ホースライディング	6	38	44
ガーデニング	—	67	67
スポーツⅡ	—	137	137
生活調理	—	73	73

(5) 生徒情報管理システムの整備

高等学校では生徒の出席状況、成績状況等の把握は欠くことのできない基本的な最も重要な要素であることは云うまでもない。総合学科では、選択制と単位制が導入されるために、従来に比べて多くの科目が開講され講座数が増えるだけでなく、学習集団は流動的で常に入れ替わる。生徒の動線は複雑で、個々の生徒について担任・教科担任が各時限の活動の様子や、科目の出席状

況、成績状況について把握することは困難である。また、生徒の学籍関係の扱いが多様で煩雑となり、学習面、進路指導面で指導のタイミングを失する恐れもある。生徒全員がそれぞれの目標にしたがって個性的な生活を営んでいる中で、日々発生する生徒の膨大なデータを取り扱う業務を効率化して教師の職務の煩雑さを避け、正確さと迅速さを求めるためにはコンピュータ管理システムの導入が不可欠である。

学習集団が曜日、時間ごとに頻繁に入れ替わるため従来のクラス単位の出席簿と教科担任の教務手帳による出席管理では生徒の出欠や成績の把握は難しい。選択制、単位制という特殊な環境で生徒の出席簿・成績簿・個人成績簿に記入するためにはクラス担任が教科担任から受け取った出席表・成績表から転記しなければならないので大変な時間と労力を要する。

① 出席管理

担任が生徒を把握する機会は朝のHRと終礼だけ、従来の学校であれば担任はいつでも、出席簿を見て生徒の授業への出席状況を確認できる。総合学科でもばらばらに動く生徒の様子がすぐに把握できるよう対応しておかなければならない。

総合学科で発生する出席や成績処理に関する業務を従来の手作業で処理すると図(1)のようになるクラス担任はこの事務的なデータ整理に時間を費やすことが多くなり、生徒相談や学習指導、進路指導など本来の教育活動に専念できなくなる。

コンピュータによる出席の登録方法は幾つか挙げられるが、翔陽高校では教科担当者が従来の出席簿に出席状況を入力するとき同じ感覚、つまり基本的には全員が出席するものと考え欠席者だけを入力する方法を採用した。この方法はIDカードを使って出席者を登録する方式に比べて、出席確認の時間が短時間で済み好評である。

図(1) 従来からの手作業による出欠処理・成績処理

事前準備	年度始めに科目受講者名簿と学級毎の科目受講者名簿(欠席者カード)を作成 欠席連絡棚の設置(学級毎の6校時分の棚を決められた場所に設置) クラス担任は個人ごとの成績簿を年度始めに作成する	
出欠処理の手順	成績処理の手順	
教科担任は教務手帳の受講者名簿に欠課者を記入するとともに、学級毎の科目受講者名簿《欠席者カード》にも欠席者を記入する。	定期考査終了後、教科担任は学級毎の科目受講者名簿に成績と欠課時数を記入し、クラス担任に渡す。	
↓		
教科担任は、授業終了後1日の決められた時刻内に、クラスごとの欠席連絡棚に欠席者カードを入れる。	クラス担任は、個人毎の成績簿に成績と欠課時数を記入する。	
↓		
クラス担任は、決められた時刻以降に学級の欠席連絡棚からカードを集め出席簿に記入する。		

② 時間割管理

生徒の一日は登校して、朝HRで担任の点呼や連絡を受けた後、各自の時間割によって、毎時間教室を移動し、授業終了後再びHR教室に戻って終礼を受けて放課となる。翔陽高校においては完成年度の平成10年で280名の2年次生の中で同じ時間割の生徒は1組もなかった。280通りの時間割で生徒は動いていた。このような状況では、一人の生徒が今どの教室で何の授業に参加しているかということはすぐには把握できない。保護者などから緊急の連絡があった場合直ちに生徒の所在を明確にできなければならない。個々の生徒の時間割と動向が瞬時にわかるシステムを備えておくことが求められる。

③ 成績管理

定期考査の成績については、選択した科目が生徒によって異なるので、従来のように1クラスを一枚の成績一覧表で表すことはできない。教科担当者も様々なクラスや学年から集まった各生徒について、それぞれの担任にいちいち成績を手渡しすることは大変な負担になる。担任の側から見ても、履修科目名、履修科目数が各人異なるので、集計漏れのないようにまとめることは困難を極める。コンピュータ管理を導入するとは手計算しなくても簡単に、正確な集計結果が出力できるし、担任の雑務軽減に欠かすことができない。

④ 学籍管理

学籍簿についても個人によって選択科目、修得単位数が異なる、クラスや学年ごとの同一様式を印刷して後で書き込むようなことができない、選択した科目にあわせた一人一人の学籍簿が必要である。

⑤ 時間割編成支援システム

必修科目や学校指定科目を履修しているかなどの点検や確認をする卒業要件のチェック、開講科目と受講者数などの調整、時間割展開表、定期考査時間割の作成など目的に応じた正確なデータ処理が必要である。特に、展開表の中で希望科目を効率的に展開するための受講者数の調整には絶対に欠くことができない。図(2)に生徒情報システムの体系を示した。

図(2) 生徒情報システムの体系

生徒情報システム	生徒情報基本システム	新入生登録、在校生処理(更新・異動)、生徒名簿印刷、学生証発行等
	出欠処理システム	講座別出席名簿作成・印刷、出欠状況集計処理、出欠状況印刷等
	成績処理システム	講座別成績登録、成績一覧表、個人成績表印刷、増単位登録、単位認定、卒業生登録・印刷等
	履修・時間割編成支援システム	開設科目登録・必修科目登録処理、生徒履修科目処理、時間割編成処理、時間割印刷(生徒別、教員別、教室別)等
	指導要録等様式印刷システム	指導要録・調査書当様式登録、個人別指導要録等様式印刷

⑥ 生徒管理システムの安全性

生徒個人情報保護の観点から、教師のそれぞれの立場によって情報閲覧の段階が必要である。教科担任においては自分が担当する科目についてのみ、生徒の出席状況と成績が入出力できれば良い。学籍管理においても前年度入力した内容等については書き換えることができないようにしなければならない。このシステムの管理については管理者のグレードを定め登録済み情報の安全を確保するとともに、校内だけのネットワークにとどめ外部との接触を絶ったものでなければならない。

9 総合学科の成果と課題

(1) 翔陽高等学校における成果

「心豊かで個性に富み、活力にあふれ、かつ礼節をわきまえた生徒を育成し、豊かな教養・専門知識・技術を高めて、地域社会が求めている人材の育成を目指す。」を総合学科の教育目標として教育活動を展開してきたが、創設8年目の平成15年度の翔陽高等学校教育懇話会説明資料からその成果を検証する。また、平成18年度に学校評価の一環として実施した生徒保護者へのアンケートの結果も一部考察したい。

① 学習意欲が向上（やりたい・好きな科目が勉強できる柔軟な教育課程）

- i) 興味・関心や進路希望に応じて自由に科目選択ができるため、学習意欲が高まり生き生きとした高校生活を送っている。
- ii) 進路目標が明確な生徒は、計画的・意欲的な学習活動を行っている。

② 進路状況（特に進学）の活性化（キャリア教育の成果）

1年次「産業社会と人間」2年次「インターンシップ」「上級学校体験」3年次「進路研究」と続く進路啓発活動の成果が見られる。（表9-1～9-4）

- i) 上級学校進学者の増加。
- ii) 就職の100%内定。
- iii) インターンシップの評価。（生徒・事業所のアンケートから）

表9-1 各年度別進路状況

	学科制				総合学科				
	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14
進学者数	53	54	70	72	115	112	126	153	168
就職者数	227	204	196	200	145	155	156	151	143
卒業者数	280	258	266	272	260	267	282	304	311
進学率%	18.9	20.9	26.3	26.5	44.2	41.9	44.7	50.3	54.0

表9-2 主な進学先

H13	鹿児島大、熊本県立大、熊本学園大、九州東海大、崇城大、九州ルーテル学院大、尚綱大、九州産業大、福岡工業大、九州国際大、第一福祉大、九州看護福祉大、福岡工業短大、银杏短大、尚綱短大、中九州短大、長崎短大、中村学園短大、国立八代高専、県立技術短期大学校、県立農業大学校、職業能力開発短期大学校
H14	熊本県立大、熊本学園大、九州東海大、崇城大、九州ルーテル学院大、明治大、東京農業大、久留米大、国際保健科学大、長崎ウエスレヤン大、西九州大、インターナショナルパシフィック大、国立台湾師範大、九州龍谷短大、尚綱短大、精華女子短大、大阪形成短大、県立保育大学校、県立技術短期大学校、県立農業大学校

表9-3 インターンシップの評価 生徒 《参加生徒278人のうち264人が回答(%)》

自分の適性を知ることができたか	よくできた 22	だいたいできた 63	できなかった 15
社会人としてのルールやマナーを学ぶことができたか	よくできた 50	だいたいできた 47	できなかった 3
インターンシップをやってどうだったか	よかった 93	どちらでもない 6	よくなかった 1
進路について考えるきっかけになったか	なった 54	ならなかった 11	解らない 35

表9-4 インターンシップの評価 事業所 《受入れ事業所90社のうち75社から回収(%)》

生徒の実習態度について(真剣さ・積極性)	大変よい 47	よい 52	悪い 1
生徒の礼儀について(挨拶・言葉遣い等)	大変よい 44	よい 52	悪い 4
来年度受け入れについて	受け入れ可能 84	難しい 1	解らない 15
5日間という期間は	適当 87	長い 5	短い 8

③ 個性の伸長

総合学科になって各種大会等の入賞という結果で生徒の活動の成果が見えるようになった。特徴的なことは、各専門分野間のボーダーがなくなり、情報を交換し合い協力的になったことがあげられる。たとえば、すでに発表会の終わった系列の生徒が、他の系列の生徒に対し研究発表についてのノウハウの指導をしている光景が見られた。専門高校であれば学科間のセクト意識、競争意識が強く、秘密主義に陥りやすく情報交換はほとんど行われぬ。クラスの仲間が、それぞれ違った専門分野で努力している姿を見ることのできる総合学科では簡単に情報交換が行われ、互いに助け合うという行為が自然に発生したことになる。生活集団と学習集団が異なる総合学科の利点が成果として現れた。

- i) 熊本県生徒研究発表大会等で普通・工業・農業・家庭の各部門での最優秀賞（1位）受賞。
（工業の研究についてはNHK第1ラジオで全国放送される）（表9-5）
- ii) 部活動も文武両面で活躍など「個性重視の教育」が前面にでた。（表9-6）

表9-5 各種研究発表等の結果（平成14年度）

教科	大会名	結果
普通	熊本県生徒理科研究発表大会	最優秀賞
商業	熊本県高等学校生徒商業研究発表大会	優勝
工業	熊本県工業高等学校生徒研究発表大会	最優秀賞
農業	熊本県学校農業クラブ連盟農業鑑定競技大会	最優秀賞
家庭	熊本県高等学校家庭クラブ連盟研究発表大会	優秀賞（1位）

表9-6 部活動実績（平成14年度）

運動部	フェンシング（九州大会男子優勝、インターハイ女子ベスト8、男子16位）馬術（全国高等学校馬術選手権出場）テニス（高校総体団体4位）、サッカー・男子バレー・男子バスケット（高校総体ベスト16）、空手個人（九州大会出場）、短剣道（全国大会出場）
文化部	熊本県吹奏楽コンクールBパート（金賞、最優秀賞）、書道（全国書道展入選）
その他	草枕」国際俳句大会イメージ作品の部俳画（大賞）、熊本県科学研究所展示会（熊本県賞）

④ 地域や生徒のニーズにあった学科としての高い関心（表9-7）

- i) 中学生の体験入学数の増加。（旧学科制のときの約2倍）
- ii) 入試倍率は1.5～2倍の高水準を維持している。
- iii) 志願者の学力も上昇。（合格最低点の上昇）

表9-7 高校入試の推移（倍率）と体験入学者数

	学科制		総合学科							
	H6	H7	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15
推薦入試	1.53	1.96	2.37	1.67	2.07	1.91	1.82	2.10	1.58	1.71
一般入試	1.63	1.51	1.84	1.63	1.68	1.54	1.50	2.00	1.52	1.59
体験入学	204	315	614	605	627	763	661	588	638	524

⑤ 生徒と教師とのコミュニケーションの深化

- i) 科目選択や進路相談の機会が多く、進路指導室・職員室・図書館への出入りが増えた。
- ii) 科目選択の結果、少人数学習集団が形成されことでゼミ形式の習熟度別授業ができ、授業を通して教師と生徒のコミュニケーションが深まっている。

⑥ 安心して任せられる高校、明るい雰囲気の高校として地域に定着

- i) 個に応じた科目選択や進路選択は、生徒同士に個をお互いに認め合う気風を生み出し、「いじめ」のない高校として定着してきた。
- ii) 女子生徒の入学が大幅に増加し、生徒の問題行動が減少した。
- iii) 生徒の表情が明るく、挨拶や接遇が自然に行えるようになった。

⑦ 人間教育・感性教育の推進、および地域との連携

学校設定科目「グリーンデザイン」と積極的な地域活動への参加。

- i) 草花の播種・栽培を通して、生命の尊厳や収穫の喜びを体験する。
- ii) 地域活動、ボランティア活動への積極的参加、施設での合同調理会などを通じた心優しい人間の育成。

⑧ 中途退学者の減少

- i) 中途退学者が総合学科になって半減した。しかし、ゼロになっていない。その背景として、選択制においては自主性と自己責任が重んじられ、学校生活を送る上では強い自己管理が求められるという総合学科の特性があることは否めない。(表9-8)
- ii) 退学の主な理由は、家庭問題による精神的不安定、専門学校への進路変更、中学時代からの不登校など。

表9-8 中途退学者数の推移

	学科制		総合学科 (完成年度は平成10年)						
	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14
中退者数	34	32	15	19	16	15	17	13	11
総学級数	21	21	21	21	21	22	23	23	22
中退率%	4.0	3.8	1.8	2.3	1.9	1.7	1.8	1.4	1.2

⑨ 一人当たりの読書量の増加

総合学科になって積極的に図書購入や、インターネットの接続など図書館内の環境整備に努めた。「産業社会と人間」や「課題研究」の学習の場所としても図書館の利用が活発になった。また、平成14年度から「朝の読書」を日課として本格実施した。

- i) 毎朝7:30には図書館が開くのを待つ生徒が入り口に並ぶ。
- ii) 総合学科完成年度(平成10年)頃から貸出冊数が増え始めた。(表9-9)

表9-9 図書貸出数の推移

	学科制		総合学科 (完成年度は平成10年)						
	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14
貸出冊数	2287	1211	1843	1697	2666	4647	5496	6440	7940
一人当たり数	2.6	1.4	2.2	2.0	3.2	5.3	6.0	7.0	9.0

⑩ 家庭との連携強化

- i) キャリア教育や科目ガイダンスをとおして、教師と生徒・保護者が一体になって生徒の特性に合った進路を見出さなければならず、保護者も自ずと学校に足が向きPTA活動も活発になった。
- ii) PTA執行部を中心に、年最低1回は学校行事に参加する「一人一役運動」が展開され、学校行事への保護者の参加を促している。(表9-10)

表9-10 主なPTA活動

一人一役運動の内容 (平成13年度から実施)	広報活動(年3回育友会新聞発行) 登下校指導、夏祭り指導 ミニバレーボール大会 各地区懇談会、学年別懇談会、クラス別懇談会 翔陽祭(餅つき、おにぎり)、バザー委員会 マラソン大会(交通指導、豚汁づくり)
---------------------------	--

⑪ 生徒・保護者アンケートから³

平成18年度 翔陽高校では学校評価の一環として生徒や保護者にアンケートを行った。これまでにあげた総合学科の成果とかかわり深い点について述べたい。満足度の高いほうから4段階評価で回答してある。

生徒アンケートから(質問の内容と3、4と評価した者の割合)

- i) 「他校にない特徴がある」 87.6%
- ii) 「学校に行くのが楽しい」 68.4%
- iii) 「興味・関心、適性、進路に応じてできる科目選択が多く充実している」 79.8%
- iv) 「科目選択は自分の将来に役立つ」 76.9%
- v) 「自分自身のことで先生と話し合う機会が十分ある」 49.2%

保護者アンケートから(質問の内容と3、4と評価した者の割合)

- i) 「本校に入学させてよかった」 85.9%
- ii) 「子どもは楽しんで学校に行っている」 82.1%
- iii) 「一人一人の個性を伸ばし、進路希望達成に取り組んでいる」 78.9%
- iv) 「開かれた学校づくりに取り組む努力について」 83.5%
- v) 「子どもは授業が楽しくわかりやすいと言っている」 44.9%

アンケートの一部を抜粋したものであるが、生徒、保護者とも学校の総合学科としての特徴を理解し、生徒は楽しく学校に行っており、保護者もそれを感じているといえる。科目選択についても、その趣旨を正しく理解して、肯定的に受け止めている。このことは科目選択のガイダンスや、「産業社会と人間」「インターンシップ」など継続したキャリア教育の成果が現れたものといえてよい。進路指導への取り組みについての評価も、工夫を凝らしたPTA活動によって保護者が学校からの情報を正しく受け止め教育活動を理解していると考えられる。授業についても、親

が「もっと解りやすく指導してもらいたいと思っている。」ということは、家庭で親子の会話がなされている証であると思われる。教師は真摯に受け止め応えなければならない。

総合学科の今後の在り方に関する調査研究協力者会議報告にある「総合学科は創設のねらいを達している。」ことと一致している。なお、「自分自身のことと先生と話し合う機会が十分ある」ことに対する評価が低いことについては、科目選択などについてのガイダンスの満足度などを考慮すると、キャリア教育が浸透したことによって、より深く自分を探求しようという意欲が湧き先生と相談したいと思う気持ちがより強くなったと考えてよい。(資料1 文部科学省「総合学科の今後のあり方について」)

(2) 課題

① 教師のガイダンス能力の向上と共通理解

総合学科の教師には個々の生徒への科目選択指導(ガイダンスやカウンセリング)が大きなウエイトを占める。その上、担当する科目数や授業時数も増加する。しかし、総合学科の制度を生かすためには手抜きは許されない。このことを教師の共通理解としなければならない。生徒と教師のコミュニケーションが密になったことは成果で述べたとおりであるが、生徒は科目選択、進学就職、資格試験等について教師の指導なしでは次のステップに進めない。生徒が1年次から頻繁に進路指導室を利用するのも総合学科の特徴である。総合学科の教師はいつでも生徒の相談に乗ってやること、自分で解決できないときは誰に尋ねたらよいか、悩みの交通整理をしてやらなければならない。教師は常に進路に関する新しい情報を入手し、ガイダンス力の向上に心がけなければならない。

② 生徒の自己管理意識の向上

一人一人が自分だけの時間割で学校生活を送るためには、生徒に高度の自己管理能力が求められる。目的意識を強く持ち自らの意思で積極的に授業に参加する姿勢が必要である。そのためには授業が魅力的でなければならない。生徒の授業への期待を裏切らないためには、教師はシラバスに沿った魅力ある授業を展開しなければならない。

③ 生徒間の豊かな人間関係の育成

生活の場(ホームルーム)と学習の場が異なることは先に述べた、このことがホームルームへの帰属意識を薄れさせ、ホームルームでの人間関係が希薄になりかねない。しかし、生活の場と学習の場が異なることを生徒同士の間関係作りに役立てることが大切である。翔陽高校のスローガンは「広げよう 友と進路のネットワーク」で、学習の場と生活の場の違いを意識させるためのスローガンである。様々な進路目標を持った生徒が集合したホームルームは社会性を育てるに好都合な集団である。専門学科では入学してから卒業までクラスも授業も常に一緒というところがほとんどである。このような生活ではお互い濃密に知り合うことにはなるが息苦しさも感じられる。総合学科のホームルームは個性の違い、生き方の違いを認め合いながら生活を共にするということになるから幅広い人間関係が育まれる。ホームルームへの帰属意識を高め、互いに協力し合う人間関係を作る工夫が必要である。

④ 生徒指導の徹底

個性尊重教育を旨とする総合学科では科目選択が自由に、しかも個人の意思を最大限尊重して行われる。生徒は一人ひとり自分だけの時間割に沿った学校生活を送っている。このことが全ての高校生活が自由であると勘違いし、服装や化粧など生徒指導面で校則を守らない生徒がいる。高校生は未完成の人間という意識で、十分な生活指導を行わなければならない。

特に、制服をなくし服装を自由に行っている学校や、単位制のために、時間割に空き時間を認めている学校もあるから生徒指導は必要ないと思っている教師もいる。科目選択や学習については自主性や自発性を尊重しながらも人間としてのあり方、生き方の根幹をなす生徒指導については徹底した指導が必要である。

⑤ 地域との絆

生徒の高い進路意識を育むために地域の協力が欠かせない。きめ細かな情報発信に努め信頼関係を深めておく。

定期考査は開講科目が多いため、従来の学校のように3～4日で集中して実施することができない。そのために講座の中で実施することになるが、多人数が受講していくつも講座で展開している科目については問題が共通しており、各授業の中で個別にはできない。総合学科の定期考査は、3～4日の一斉考査と授業の中でやる講座別試験で成り立っている。定期考査になると、選択している科目が一斉考査の時間割になくなる生徒もいる。1、2限目にテストがなく3限目だけだったり、2限目だけになったりする生徒もでてくる。考査期間中は自分の考査の時間割に合わせて登下校するためにだらだらした登校風景になる。普通高校や専門高校では、日頃学校を休みがちな生徒もテストのときはまじめに出席することになるのであるが総合学科は逆になる。このような生徒の生活様式の変化を地域の人たちに十分理解してもらわなければならない。(資料2 年間行事予定表)

10 終わりに

「産業社会と人間」を開設したり、選択科目を増やすなど、教育課程の編成・運用において普通高校、専門高校が総合学科に近づいている。

生徒一人一人が自分自身の個性を理解し、主体的に学習に取り組むことのできる総合学科になるためには、総合学科の設置趣旨を理解したリーダー、柔軟な教育課程、総合学科の特性を十分理解した教師集団によって教育活動が展開されなければならない。総合学科の健全な運営は、「生きる力」を支える能力や関心・意欲・態度の全体的育成、学校、家庭および地域における学習や生活を通して生徒が自ら考え、主体的に判断し、行動するために必要な資質や能力などを育む教育の実践と考えなければならない。

さまざまな教育活動を通して、個性的な教育を目指す総合学科としての機能を十分発揮することが、普通高校や専門学科高校のそれぞれの特徴を伸ばすことになり、偏差値重視の受験競争や学歴社会の弊害も緩和されることにつながるものと思われる。

総合学科は多くの期待を担ってスタートしたが、中退者減少にはつながったものの、中退者ゼロには至らなかった。(表9-8)非常に高い高校進学率の中では、さまざまな生徒が入学してお

り、個性重視の教育活動が展開されていても、一つの制度だけで全ての生徒に応えることは不可能であったということは課題として残る。しかし、総合学科のキャリア教育は徐々にその成果を発揮し、卒業生を受け入れている企業や大学・専門学校の関係者から目的意識の明確さや学習・仕事への意欲の高さ、表現能力等について高い評価を受けている。

総合学科では生徒が何を学ぶか自ら決定し、目標にあった学習計画を作り学校生活を送る。お仕着せのシステムの中で過ごすのと違って、目標設定力、自分の責任に基づく自己判断力、自己決定力や自己完遂力が身につくものと思われる。

第3の教育改革は生涯学習社会を作るための改革と言われている。これからの総合学科のあり方を考える上でのキーワードは“原点に帰る”ことである。総合学科の特色を生かすためにはどうしなければならないか、設立趣旨を見失わないこと、易きに走らないことである。

現行の高等学校学習指導要領では総合学科の設立当初、原則履修科目であった「情報に関する科目」が科目「情報」として必修となり全ての高校生が学習することになった。また、「課題研究」が「総合的な学習」へ発展した。このことは、全国の総合学科高校の成果が評価されたことであり、一連の教育改革の中で総合学科が果たした役割は大きなものであったと思われる。

多くの教科に選択科目が設けられ、学習指導要領の弾力的な運用が進められるなど普通科、専門学科とも総合学科に近づくことになり、全ての学校が総合学科化している中で、今回述べた教育課程、教師像、学校経営に関することは、総合学科の実践を通して見えたことであるが、今後の全ての高校についてもいえることである。

資料1 文部科学省「総合学科の今後のあり方について」(報告)

平成12年1月20日

～個性と創造の時代に応える総合学科の充実方策～

総合学科の今後の在り方に関する調査研究協力者会議報告(要旨)一部抜粋

I 総合学科の評価と課題

総合学科の在校生、保護者、卒業生、教員、中学校の生徒、保護者、中学校の教員、及び大学、専門学校、企業等の関係者合計約1万人に対するアンケート調査(平成11年3月～5月実施)の実施

1. 総合学科の評価

(1) 創設時のねらいを達成している。

- ・就職希望者にも進学希望者にも柔軟に対応することができる生徒は進路についてじっくりと考えることができる。
- ・個性を生かした主体的な学習が行われており、生徒は学ぶことの楽しさや成就感を体験し、いきいきとした学校生活を送っている。
- ・生徒は「やりたい勉強」をするために総合学科を選んでおり、高等学校間の序列意識の打破に一定の役割を果たしている。
- ・主体的な科目履修を通して生涯学習の基礎が培われている。

(2) 今日的な課題に対応している

- ・主体的な学習や課題解決学習を通して「生きる力」の育成に成果を挙げている。
- ・自律的な学習態度や勤労観・職業観の育成を通して、学校から社会及び上級学校への円滑な移行に成

果を挙げている。

- ・中高一貫教育の高等学校段階を総合学科にすることにより、総合学科のねらいをより一層達成することが期待できる。

資料2 年間行事予定表(抜粋)

平成18年度学校経営案

6月			9月		
1	木		1	金	
2	金	高校総体開会式	2	土	
3	土	機械製図検定(一次)	3	日	
4	日	第2種電気工事士試験(一次)	4	月	
5	月		5	火	
6	火		6	水	
7	水		7	木	
8	木	講座別試験前期中間	8	金	
9	金		9	土	
10	土	第一回英検(一次)	10	日	
11	日		11	月	
12	月		12	火	
13	火		13	水	
14	水		14	木	
15	木	一斉考查前期中間	15	金	基礎製図検定
16	金	計算技術検定	16	土	
17	土		17	日	
18	日	就職・公務員模試	18	月	講座別試験前期末
19	月		19	火	
20	火		20	水	
21	水		21	木	
22	木		22	金	
23	金	科目選択調査、情報技術検定	23	土	進連協模試
24	土		24	日	
25	日		25	月	
26	月	成績一覧表提出	26	火	一斉考查前期末
27	火		27	水	
28	水		28	木	
29	木		29	金	終業式
30	金		30	土	秋休み(10/4まで)

注

- 1 高等学校学習指導要領第1章第2款の4及び5
- 2 翔陽高等学校「学校経営案」(平成18年度) p37～45
- 3 翔陽高校便り「翼にのせて」(第9号 平成19年3月) p2～3

参考文献

- ミヤザキヒロシ訳：コナント報告 民主教育協会 昭和35年(1960年)10月
- 大津産業高等学校：文部省指定平成6・7年度高等学校教育改革推進協力校「研究成果報告書」
平成8年(1996年)3月
- 文部省初等中等教育局職業教育課：総合学科関係資料 平成12年(2000年)3月
- 文部省編集：文部時報No.1422 平成7年(1995年)6月
- 文部科学省：高等学校学習指導要領解説(総則編)平成17年(2005年)8月
- 翔陽高等学校：産業社会と人間「資料集」平成15年(2003年)
- 同：学校の概要 平成16年(2004年)
- 同：平成16年度「インターンシップ報告書」平成16年(2004年)
- 同：平成18年度「科目案内」平成18年(2006年)
- 同：平成6年度, 10年度, 18年度版「学校経営案」
- 同：平成18年度「教育懇話会資料」平成19年2月(2007年)
- 文部科学省ホームページ：<http://www.mext.go.jp/> 総合学科の今後のあり方について
- 文部科学省ホームページ：<http://www.mext.go.jp/> 総合学科について